

防災・減災教育事業「72時間チャレンジキャンプ」が
児童・生徒に及ぼす教育的効果に関する調査研究

令和7年3月
福岡教育大学 兄井 彰

自然体験活動を中心とした防災キャンプが、子どものレジリエンス向上に及ぼす影響

1. はじめに

近年、自然災害の頻発化とその規模の拡大が深刻な社会問題となっている。このような状況下で、災害への備えとして「自動・共動」の能力を育む防災教育の重要性が高まっている。特に、子どもを対象とした教育は、災害時の生存能力や精神的な回復力（レジリエンス）を育むための鍵として注目されている。

自然環境での体験活動は、これらの能力を向上させる効果が確認されており（中島・田中，2014；湯川・志賀，2016）、教育現場でも見直されている。本研究は、このような子どものレジリエンス向上に及ぼす自然体験活動の効果を調査することを目的として実施された。

2. 目的

本事業が参加児童・生徒に及ぼす教育的効果を明らかにするために、自然災害発生時やその後の避難生活に対応するために必要不可欠な力と考えられるレジリエンス（山田ら，2023）に着目し、キャンプ前後及びキャンプ終了後3ヶ月の児童・生徒のレジリエンスの状態を比較し、検討することを目的とする。

3. 調査時期

本調査は、自然体験活動レジリエンス測定尺度を用いて、キャンプ開始直後の開会行事後と終了直前の閉会行事前に実施した。また、キャンプ終了後3ヶ月後に Microsoft forms を用いて調査を実施した。

4. 調査対象者

本事業の「72 時間チャレンジキャンプ」に参加した児童・生徒で、小学生 16 名、中学生 10 名の全 26 名であった。キャンプ前後の分析対象者は 26 名であったが、キャンプ終了後3ヶ月後の分析にはデータ不備がない小学生 11 名、中学生 7 名の全 18 名を対象とした。

5. レジリエンスの測定尺度

レジリエンスは、「困難で脅威的な状況に直面し、一時的に心理的不調に陥ったとしても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、適応する能力」（小塩ら，2003）や、「ストレスフルな状況でも精神的健康を維持または回復する心理的特性」（石毛・無藤，2006）として定義されている。この能力は、自然災害発生時や避難生活への対応において不可欠な力であると考えられる（山田ら，2023）。

本事業では、山田ら（2023）によって開発された「自然体験活動レジリエンス測定尺度」を用いて調査を実施した。この尺度は、以下の 4 因子・全 18 項目で構成されている。

1. 自己効力（11 項目）：自分の可能性を認識する能力。
2. 感情調整（3 項目）：自分の感情をコントロールする能力。
3. 親和性（2 項目）：他者や状況に肯定的に接する能力。
4. 他者理解（2 項目）：他者の気持ちや行動を察する能力。

この測定尺度を用いることで、自然体験活動におけるレジリエンスの多面的な評価を

目指した。

6. 結果

キャンプ前後における児童・生徒のレジリエンス尺度全体および下位尺度の得点の平均と標準偏差を表1に示した。レジリエンスの測定時期（事前・事後）と校種（小学生・中学生）を要因とする2要因分散分析を各尺度ごとに実施した。その結果、中学生のレジリエンス全体および自己効力の尺度得点において有意な差が認められ、事前よりも事後の得点が高かった。このことから、本キャンプの経験を通じて、中学生においては自分の可能性を認知する自己効力が高まり、それに伴いレジリエンス全体が向上したと考えられる。一方、小学生においては、キャンプ前後でレジリエンスに有意な変化は認められなかった。

さらに、キャンプ前後に加えて、キャンプ3か月後の児童・生徒のレジリエンスの状態を含めた分析を行った。キャンプ前後およびキャンプ3か月後における児童・生徒のレジリエンス尺度全体および下位尺度の得点の平均と標準偏差を表2に示した。レジリエンスの測定時期（事前・事後・3か月後）と校種（小学生・中学生）を要因とする2要因分散分析を各尺度ごとに実施した。その結果、小学生のレジリエンス全体および自己効力の得点において有意な差が認められ、事前および事後と比較して3か月後の得点が低下していた。このことから、小学生のレジリエンスはキャンプ体験直後よりも3か月後に低下する可能性が示唆された。

一方、中学生については、キャンプ前後に加え、キャンプ3か月後を含めた分析においても、レジリエンス全体および自己効力の得点が事前よりも事後で高いことが確認された。ただし、3か月後のレジリエンス全体および自己効力の得点は、事前よりも高い傾向を示したものの、有意差は認められなかった。このことから、中学生はキャンプを通じてレジリエンスが向上したが、その効果が3か月後まで維持されているとは言い切れない。

表1. キャンプ前後における参加者のレジリエンス尺度得点

校種	測定時期	レジリエンス	自己効力感	感情調整	親和性	他者理解
小学生 (16名)	事前	89.1 ± 11.8	54.7 ± 7.4	14.7 ± 2.8	10.1 ± 1.5	9.6 ± 1.8
	事後	90.4 ± 11.0	55.5 ± 6.7	14.4 ± 2.7	10.4 ± 1.5	10.1 ± 2.1
	有意差	なし	なし	なし	なし	なし
中学生 (10名)	事前	82.0 ± 5.1	49.9 ± 3.4	13.6 ± 1.7	9.3 ± 1.2	9.2 ± 1.1
	事後	89.1 ± 6.8	54.8 ± 4.3	14.3 ± 1.8	10.0 ± 1.8	10.0 ± 1.0
	有意差	事前<事後	事前<事後	なし	なし	なし

表2. キャンプ前後及び3か月後における参加者のレジリエンス尺度得点

校種	測定時期	レジリエンス	自己効力感	感情調整	親和性	他者理解
小学生 (11名)	事前	90.0 ± 11.3	55.1 ± 7.6	14.8 ± 2.2	10.5 ± 1.3	9.5 ± 2.0
	事後	90.3 ± 11.4	55.3 ± 6.9	14.3 ± 2.9	10.6 ± 1.4	10.1 ± 2.1
	3か月後	80.0 ± 9.4	48.3 ± 6.7	13.4 ± 1.8	9.4 ± 1.4	9.0 ± 1.5
	有意差	事前・事後>3か月後	事前・事後>3か月後	なし	なし	なし
中学生 (7名)	事前	82.3 ± 5.7	49.6 ± 3.9	13.7 ± 1.9	9.4 ± 1.4	9.6 ± 1.0
	事後	90.6 ± 6.3	55.9 ± 4.4	14.3 ± 2.0	10.4 ± 0.7	10.0 ± 1.1
	3か月後	89.4 ± 4.2	54.3 ± 2.5	14.4 ± 1.4	10.4 ± 0.9	10.3 ± 1.2
	有意差	事前<事後	事前<事後	なし	なし	なし

7. 考察

本調査は、参加した児童・生徒の各測定時期におけるレジリエンスの変化を比較・検討し、キャンプの教育的効果を明らかにすることを目的として実施した。

その結果、キャンプ前後の比較では、中学生において自己効力が高まり、全体としてレジリエンスが向上したことが示唆された。一方、小学生ではレジリエンスの有意な向上は見られなかった。小学生の個々のレジリエンス尺度得点を詳細に確認したところ、顕著に向上する児童がいる一方で、事前よりも事後の得点が低下する児童も確認された。このことから、「72 時間チャレンジキャンプ」は、児童・生徒のレジリエンスを高める教育的効果を持つものの、個人差が存在することが示唆される。この結果は、先行研究とも一致しており、自然体験活動を含むチャレンジキャンプが児童・生徒に一定の教育的効果をもたらすことが期待できる。

本事業では、7泊8日の「72 時間チャレンジキャンプ」を通じて、ほとんどの参加者が困難な状況を最後まで乗り越えることができた。この経験を通じて、「やればできる」という自己効力が顕著に向上したと考えられる。

また、キャンプ前後およびキャンプ3か月後の比較では、キャンプによって高まった児童・生徒のレジリエンスは、3か月後まで維持されず、日常生活を送る中で低下していったことが示唆された。このことから、キャンプの教育的効果を持続させるためには、キャンプ終了後、日常生活に戻った後のフォローアップが必要であると考えられる。

8. 事業を通しての主な感想

- ・新しい班で緊張したが、楽しく班の人と顔を覚えることができた。
- ・人見知りをしていた。
- ・楽しかった。だけど去年と同じ問題だったら答えが分かって嬉しかったのに。
- ・だいたいの人の名前を覚えることができた。
- ・1日目からみんなで仲良く楽しめてすごく良かった。
- ・いろんな人としゃべることができた。
- ・最初すぎて、あまり班員と力を合わせることができなかったけど、楽しかった。
- ・別に楽しくはなかった。
- ・仲間をつくれてよかった。
- ・名前を覚えながら遊べて楽しかった。
- ・ウブンツ（カードゲーム）で先にみつけて嬉しかった。
- ・まだあまり知らない人がたくさんいたけど、レクリエーションをして少し仲良くなった。

9. 文献

石毛みどり・無藤隆（2006）中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究、14、266-280

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治（2002）ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究、35、57-65

中島祐介・田中純夫（2014）児童における身体活動とレジリエンスおよび社会的スキルとの関連 ～自然体験活動に着目して～ 順天堂スポーツ健康科学研究、5(2)、39-43

山田亮・比屋根哲・八幡直輝（2022）森林環境下における自然体験活動の教育的効果と分析手法の検証。日本森林学会誌、104（1）、31-38

- 山田亮・野村華純・本村明夏（2023）自然体験活動レジリエンス測定尺度の作成とプログラムによる教育効果の検証―青少年教育施設による防災教育プログラム開発の事例から― 教育支援協働学研究、5、49-58
- 湯川枢・志賀亮太（2016）なすかしの森セカンドスクールが参加児童に及ぼす効果と指導方法の検討：レジリエンスの変容に着目して 青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要，国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター 編，(4)，62-70
小学生 64 名